

第18回 これからの男性援助を考える

男性援助の視点

坊隆史 松本健輔

前々回（第16回）では男性が相談場面で率直に主訴を語ることが困難であり、援助者がしっかり傾聴を重ねることで少しずつ本当の主訴が見えてくることを説明した。今回は援助者が男性の特徴をうまく理解して男性クライアントに貢献していくために有効な視点を紹介したい。

アンダーグラウンド性

暴力、ハラスメント、性的逸脱行動といった男性課題に対して、心理臨床を含む対人援助は援助の方法論を持ち合わせてこなかった。こうした実情に対し、本連載 は男性が抱える心理臨床的課題には男性ジェンダーの視点をもつことが効果的であることを述べてきた。なぜなら男性に多くみられる心理臨床的課題には男性 ジェンダーと親和性があるからである。男性性と心理臨床的課題への関連は研究レベルでも少しずつ進展を見せつつある。（例えば鈴木、2008）。

一方で援助現場では援助者に適切な援助をしてもらえず、社会資源をたらい回しされることによる二次被害でさらに疲弊してしまっている男性クライアントに出会うことがある。例えばDV被害者の男性がその典型である。DV被害者というテーマは社会の課題として社会的認知が少しずつ高まりつつあるものの、対人援助、とくに心理臨床のフィールドでは援助者がなかなか増加しない。こうした現状の仮説の一つとして、男性問題のアンダーグラウンド性の高さが考えられる。男性の心理的課題には暴力性、権力、犯罪といった社会のダークサイド面に目を向けなければならない課題が多い。また道徳・モラルに反する話題が援助場面で登場することも多い。援助者自身が社会を取り巻くアンダーグラウンドな一面に目を向ける視座を持つことが求められよう。それが男性の心理的課題を理解する一助となるといえる。

援助者のマイノリティ性

心理臨床の世界そのものが女性優位の世界という認識も必要である。心理臨床を志す者は女性が多く、(財)日本臨床心理士資格認定協会の認定臨床心理士は男性が全体の23.1%であるのに対し、女性は76.8%を占めている(日本臨床心理士会、2011)。つまり心理臨床(臨床心理士)の業界全体が数的に女性優位となっている現状があるといえよう。そこでは男性であること、男性ジェンダーそのものがマイノリティになっているともいえる。援助者内の女性比が高くなるほど、業界全体が無自覚に女性モードに包まれ、男性ジェンダーに対する理解も乏しくなる。近年、対人援助の領域において人種、民族、性アイデンティティなどマイノリティ性を意識した援助が注目されつつある。男性問題に直面する心理臨床家は男性ジェンダーそのものが心理臨床の中のマイノリティだという観点をもって頂きたい。そうすることで現代男性の心性の理解につながるだけでなく、実情に沿った男性援助が可能となるのではないだろうか。

筆者らは男性問題により向き合うための姿勢として、当事者性をもった男性援助を提案してきた(坊、濱田, 2012など)。援助者もひとりの男性として男性クライアントの語りを聴くことで、より深く共感し、課題克服に向き合う一助となるからである。もちろん女性援助者の場合、男性援助者と同等に利用することは難しいかもしれないが、自分が男性だったらどう聴けるか、どのように感じるか、といったことも思慮しながら男性クライアントの悩みを聴くことで、男性の効果的な援助につながるかもしれない。

欲求を喚起するアプローチ

心理臨床を含む対人援助ではクライアントのニーズに沿った援助を目指すことが重要であることは言うまでもない。野心的で競争的、行け行け押せ押せモードが優勢な男性たちに対しては、時間をかけて内面に向き合う内省的なアプローチよりも、地位・カネ・名声といった欲求を喚起して行動を活性化させるアプローチの方がマッチしているように思う。例えば、いわゆるブラック企業と呼ばれる企業の採用説明会などは人の欲求を巧みに喚起している。きらびやかな演出、一部の成功体験、参加者の不安を吹き飛ばす会場の雰囲気作りが絶妙である。就職活動生に就職を決意させる企業側のパワーが

ある。そこには男性ジェンダーにマッチする世界観がある。うまく人の欲求を喚起させることは対人援助でも同様である。儲け話、婚活、いい就職などを前向きに検討することはクライアントにとって生産的な話題ともいえる。そこでは未来かつ解決の志向性を見出すことができる。たとえ現実的でない話であったとしても、悩める男性の気持ちを前向きにすることができる。こうした欲求にストレートに向き合う話題は男性ジェンダーと親和性が高く、相談なんて意味がないと感じている男性ほど興味をもってくれる。もちろん全ての男性の悩みに該当するわけではないが、男性クライアントのニーズをうまく見立て、必要に応じて欲求を喚起するアプローチを選択することが望ましい。

まとめ

ここまで男性援助のために有効な視点を紹介してきた。今回は男性の課題はアンダーグラウンド性をはらんでいること、男性そのものが心理臨床の中でマイノリティであるということ、男性モードに即したアプローチとして前向きな欲求に触れることの3点に言及した。実はどれも目新しいことではないし、男性のみならず女性にも通用することもある。男性課題と呼ばれるテーマ群も目新しいことではないし、女性に該当することもある。男性援助は対人援助の中で注目はされずとも潜在的に存在し続けてきていた。昨今ようやくスポットライトを浴びつつあるテーマに注目されなかった視点が広まっていくことを願っている。援助の引き出しは多い方が良いのだから。

なお、今回は男性援助の理念を中心に論じた。この理念の具体例や活用例は後日紹介できる機会があればと考えている。

謝辞

今回は筆者の男性援助実践に大きな影響を与えて下さっている中村正先生とのプライベートトークで得た気づきを言語化したものである。男性ジェンダーにセンシティブな対人援助がなかなか広まらず、悩ましい日々を過ごしていた筆者に一つのヒントを与えてくださった中村先生に感謝申し上げます。

文献

- 坊隆史、濱田智崇 2012 当事者性を活かす男性援助—男性相談と従業員支援
日本コミュニティ心理学会第15回大会発表論文集
- 日本臨床心理士会 2011 第6回臨床心理士の動向および意識調査
- 鈴木淳子 2008 男性性とメンタルヘルス 日本の男性の心理学—もう1つジェンダー問題 有斐閣